

## イギリス紳士風に……

竹田 洋太郎

△シンエーフーズ株式会社参与▽

トアロードのことについて書いてみよう。だが、岡本の里に住む老人としては、戦前のトアロード、東亜道路といわれた時代、さらに戦後からいままでの三十有余年。これらはいま茫漠として記憶の底にある。これを引っ張り出してこなくてはならない。

まず山側から始めるとすれば、いま阪神在住外国人のクラブである神戸クラブは火事でその本館が焼ける前、オリエンタル・ホテルであった。米軍専用で、米新聞界の大半が占領中ここに来て来た時、記者会見に出て、米軍の新聞記事検閲もたいがいウルサイものだといったら、兵庫軍政部（というのがあった）の広報課長が横でシブイ顔をしていた。しかしその時飲んだマトモなコーヒーはとてもうまかったことを覚えてる。

ホテルの前は重工業の会社の病院、その前がトアホテルだった。ここで私は十歳のころデザイナーをたべた覚えがある。私の叔父で、もと新聞記者、本人によれば画家兼詩人である十河巖の結婚式に叔父の作による詩を朗読したのと、幼ないとはいえ父が死んで竹田家の当主であるせいで、披露宴に招かれたのだろう。

それ以来トアロードは私にとって食うことと関係する中学四、五年のころ、友人西崎健次郎君（神戸埠頭）がパウリスタの前で「おやじのツケ利くねん」ということで、古風な二階の広いダイニングルームに通され、二人で食事をしたのだが、丸坊主に黒の小倉の詰えりの少年

が二人だけ、年配のウエーターがつきつきり、というのは妙な風景だったにちがいない。

戦後新聞記者になってから、神戸経済界の人たちに、「星めし食おか」と連れていってもらったのはハイウェイ。このウマさはいまも変わらない。かくの如くひとの財政的負担において美食を楽しむのは私の最も喜びとするところだが、自分で払わないわけではない。

一時評判を得たのは生田新道との角にある杏花村のヤキソバだ。今にして思えば、なんの変テツもないが戦後数年のあの時代、あの値段で味とヴォリュームを供し得たことは大したものであった。

西洋料理では、いまは宝石店になっているところに、レストラン・ブーンがあった。料理長細田文平氏によれば千種に余るメニューを季節ごとに選んで、一流ホテルの半額で出していたというから、私ごときも、このピーフストロガノフを心から賞味し得たわけで、それがレストラン・バーグと一緒に、神戸のあちこちにブーンという名のレストランチェーンになった。昔の雰囲気やを伝えているのは、阪急三宮西口北のブーンであり、細田氏の弟子の一人が、もとのブーンのやや北で「タベルナ・テイジ」との名で開店している。レストランに「タベルナ」の名はおかしいという人もあるが、これはレッキとしたギリシャ語の酒を供する小料理屋のことである。英語ではタバリンになっていると学のあるところを

見せておくが、この名付けについては私も相談にあずかったのだ。

いま亀井堂のある高架下に、戦時中の相当あとまでアイスクリームパーラーがあり、学生時代、大阪の学校で授業が終ると、あるいはサボって、神戸から通う仲間は神戸に飛んで帰って、アイスクリームをなめた。

その仲間の数人は戦死した。

この友人たちの夢を私はいまだに見る。

そのころ、戦況の行くへについて、あるいは人生問題について、友人と話しながらトアロードを上下したものだ。

白系露人らしい老婆が、くたびれた黒っぽいドレスを身にまとい、配給物を入れたらしい袋をぶらさげて、ゆっくり、ゆっくりこの坂を上っていたのを思い出す。

また戦後、高架下で暴力団の極めてハデな銃撃戦があった。

鎮圧のために米軍が装甲車を出す。トアロードの南、

今の同和火災の建物がMP本部で、知り合いの将校のジープに乗っけてもらって、現場に急行した。MPが空に向けて自動小銃の威かく射撃をやる。それを通行人がながめている。

ギャング映画でも、ちょっと見られない風景で、私はワクワクしていたが、通行人はアッケラカンとして見るだけ。敗戦後のあの白々しい虚脱感もあったのだろう。さて私はワクワクしたのを憶えているが、どんな記事を書いたか、それとも全然書かなかったか、覚えがない。

思い出は尽きることがないが、やはりトアロードから大丸あたりまで、イギリス紳士風にケーン、つまりステッキをつけて、ゆっくりと歩きたい。

さんちかは人が急いで歩く。ここも実は相当の坂道なのだが、同じ坂道でも、トアロードはゆっくり歩くに限る。でない、その味わいはわからないからである。



トアロードはゆっくりと歩くのにふさわしい カメラ/小山 保

## 私の元町

赤尾 兜子

△俳人・毎日新聞学芸部▽

「雨のモトマチ鈴蘭灯(スズラントウ)」物心がついた私は、いつのまにか、モトマチのイメージが、こう呼べば、こたえてでてくるようになっていた。祖父の妹が、兵庫(兵庫区)へ嫁いでおり、年に一、二度、里帰りしては、神戸や、元町の話をしてくれたので、その話が、私のおさない頭のなかで、ふくらんでいたのかもしれない。

兵隊から帰った昭和二十年の晩夏、私はふと思い立ち播州の実家を出て国鉄元町駅に降りた。そこには空襲で廃墟になった元町があった。海の方まで、一目で見え、ちゃんとした建物らしいものはなく、崩れかけたビルが一つ二つとらえられたにすぎない。しかし、私は、鈴蘭灯のないこの街にすっかりはしなかった。たぶん不死鳥のように、よみがえるだろう、と思った。私のいだいたイメージをこわすのは、あまりにもかわいそうだったからだ。

不思議というか、それから五年して、私は神戸へ、それも栄町四丁目にある毎日新聞神戸支局へ赴任、およそ十年、元町本通を歩くという日々をおくった。

支局のすぐ向いに「へちまくらぶ」があり、すこし閑がある、西村貫一老を訪ねた。英国仕込みのこのおしやれな人は、東都の文人、雅人の話やゴルフの話など、屈託なく喋ってくれたが、それだけでなく、私のねらいは、自家製のカレーをいただくことにあった。まさ夫人、息子の雅司さん、口も達者なら舌も達者、でてくるもの

は、すべて旨い。まだ街に、もののそろわぬ時代だったし、私の財布もゆたかとはいえなかったので、食べ物との恵とは、何よりうれしいものであった。

元町も西の方、六丁目の国鉄のガード下に「華道クラブ」があつて、なぜそこへ足をふみいれるようになったか、よく思い出せないが、ともかく一時は、足しげく通った。むろんお花を習うためではない。いまの新日本華道家元、西村雲華さんが、このクラブの事務局長兼理事。新聞社で、タタキ(強盗)やコロシ(殺人)を刑事と争って追いかけている私は、ホッとやすらぐ場がほしかったのであろう。華道クラブへゆけば、四季の花が活けてあり、そのうえ、息をしている花が、茶を出してくれる。

昭和三十四年だったか、神戸の美味をさぐるということになった。そしてそれをまとめて、翌年の春「神戸うまいもん」という文庫本が出た。今日のうまいもん紹介の原典となった本だが、その大半は私が書いた。この取材に当る前から私はもう「たこっほ」(国鉄元町駅南路地入る)の常連になっていた。いまよく知られる「蛸の壺」の前の店で、主人の木村憲吾さんと奥さんが店を切りまわし、十人ほどで満員になってしまいが、十中九割、私は夜になるとそこに座りこんでいた。中西勝さんの出席率がもつともよかったように思うが、ここで酒をくみかわした人は、数しれない。陳舜臣、鴨居玲、田中 国夫、貝原六一、春木一夫、織田正吉、佐藤廉さん、あ



神戸のおしゃれが落着いてただよう元町 カメラ/小山 保

る日は阪本勝さん、そしてその隣に、小料理店「紅梅」があり、そのママは、「おータカラヅカ」で麗名をさせた草笛美子さんであった。中学生のとき、東京、日劇の舞台でこの女を見て、ゆめの国の人かとおどろいた私は、あまり近々と会ったので、一瞬とまどった。この店は、神戸大学の教授連がとぐろを巻き、古林喜楽さんのとどめどもとまらぬ唄が聞こえてくると、風のように喜楽先生、「たこつぼ」へも闖入なさる。猪野謙二、小島輝正さんとも「紅梅」で酒杯をあげた夜がある。

一時、気でも狂ったように通いつめたのが「元町別館牡丹園」だ。「中国人がたくさん入っているので、とびこんでみたら、実にうまかった」と食通の竹中郁さんに教えられたのははじまりで、来る日も来る日も、バカのように足をはこんだ。さいごには主人の王熾炳さんに「これから一年間、あなたができるだけ料理を一品ずつぜんぶ出してほしい」と頼んで、おおよそ平げたかと思っが、その後香港にも遊んでみて、いかに、ここで広東料理の名品、珍品を食べたかという手応えをしつかり感じた。

もつとも、その間に百余年のしにせ「青辰」のあごなずしや「藤はら」の天ぶらを知り、私はその醍醐味に耽能した。

元町は、神戸のおしゃれが、落着いてただよっているところである。一、二、三丁目までは、そのムードのなかに、悠然としている。ただ四、五、六丁目になると、そのムードはうすれ、すこし田舎じみでくる。

しかし、これも見方で、あまり悠然たる店が、ゆけどもゆけどもあるというのは、感心したものでない。

昨年、二度目のパリへ遊んだが、世界のモードの中心地、パリ一番地の周辺も、すべてが豪華な店ばかりではない。二軒、あるいは数軒おいて、ちよつと圧倒されそうな気品と誇りをもった店が見える。買い手の側からいわせてもらおうと、いつも緊張してはたまらない。一息つきつつ、ショッピングをたのしむ、そこに、まちな樂しさというものがあるのである。はなかるるか。

私の元町は、昼よりも夜、その方へ傾きがちで、それは私のいつものわるい癖である。

# 北野町の 生活のにおいが恋しくて

村上 知彦

〈漫画評論家・スポーツニッポン文化部〉



板の町北野には、どこかロマンが漂っている

ど何も知らない。異人館めぐりをしたこともなければ、もちろん内部に入ったことも、どこにどういう異人館があるのかすら、さだかでない。いつだったか、東京からやって来た知人に案内を乞われて、わざわざ異人館のない通りばかりを歩き馬鹿にされたぐらいだ。

さて、それではなぜ、ぼくにとつての「神戸・北野町」がホテル「金の鍵」なのかといえは、当然のごとく、それはある想い出にまつわってくる。といっても、ホテルにふさわしいような色っぽい話では全然なくて、この「金の鍵」というホテルは、渡哲也主演の日活映画「紅の流れ星」で、宍戸錠が根城にしていたホテルなのだ。

北野町の西のはずれ、トアロードからの坂をのぼりつめたあたりにそれはあった。ホテル「金の鍵」。れっきとした、連れ込みホテルである。なぜこんな妙な話から書きだしたかという、それが異人館より何より、北野町にあるものなかで最も、多くの「神戸」のイメージに近いものだからだ。

だいいちぼくは、北野町の異人館については、ほとん

件のほとぼりをさますため、神戸に身を隠す。やがて東京では組織同士の和解が成立し、ジャマ者となった五郎を始末するため殺し屋がさしむけられる。その殺し屋、宍戸錠が、神戸での宿として、ベッドの上で銃器の手入れをし、囮としてさらってきた奥村チヨを監禁し、渡哲也と壁もぬけんばかりの大格闘を演じたのが、このホテル「金の鍵」なのだ。

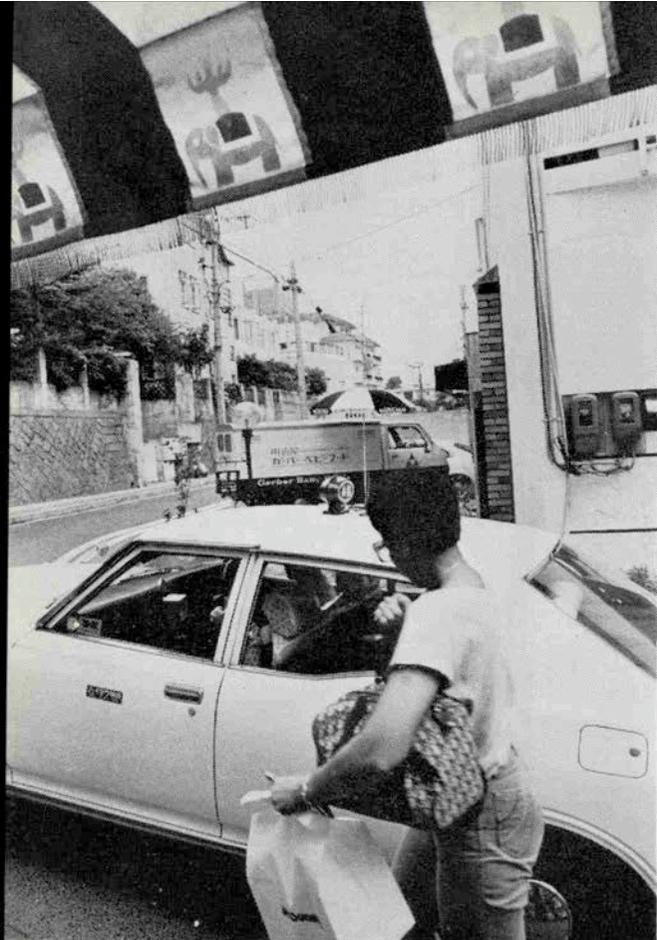
ぼくはこの映画が好きだった。ギャバン・デュービエの「望郷」と、ベルモンド・ゴダールの「勝手にしやがれ」をゴッチャにしたようなストーリー。年中「東京へ帰りにエナア」と眩き、東京から行方不明の夫を探しにやってきた浅丘ルリ子にまつわりつき、二人で外国船に乗り込んで日本を脱出しようとする渡哲也。密航の世話をする怪しげなバーや、裏切られても渡哲也を慕いつづけるバーの女・松尾嘉代、スラムやヤクザたちのたむろする港町としての「神戸」。北野町あたりを何げなく歩いていて、この「金の鍵」を発見したとき、北野町がぼくのイメージの「神戸」と地つづきの町として、急に身近なものに感じられたのだった。

このぶんなら、渡哲也の情婦・松尾嘉代の住んでいた洋風アパート、ペランダからロッキングチェアに座った渡哲也が、ぼんやり遠い海の向こうをみつめていたあのアパートも、どこかこの上の方にあるに違いないと、必死にそのへんを探し歩いたのおぼえている。とうとうそのアパートはみつからなかったが、その日から北野町

はぼくにとって、観光コースでも、散歩道でもなく、生活のにおいのする(べき)町になったのだ。

人の住んでいない異人館や、原宿まがいのファッショントウンには、だから用はなく、ひたすら裏道を選んで歩き、夜ともなれば酒に酔ってふうふう言いながら、急な坂をのぼって、港が見えるマンションとかいう粋な名前のついた友人の安アパートに転がり込む。ぼくにとって北野町はそんな町だ。夜とともにけだるい港町の気分が坂をはいのぼってきて、昼まで寝ていると酒気が陽ざしと共に湯気となってたちのぼり、冷たいビールで頭をシャキッとさせてぼんやり、眼下に広がる港町を見下ろす。そんな北野町暮らしにあこがれている。

ところでホテル「金の鍵」の内装は、やはり日活映画風に、バタクさくケバケバしいくせに、妙に映画の無国籍な雰囲気は溶けこんでしまう、奇妙きつれつなインテリアだったのだろうか。一度なかへ入って確かめてみたいと思っっているうち、数年前にマンションに改装されてしまい、すでにそれを確かめる術はない。



北野にも、生活のにおいのする町角がある カメラ/小山 保

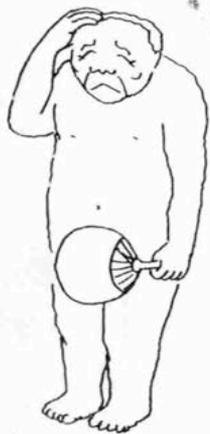
# フジテレビ 講座

LESSON・8

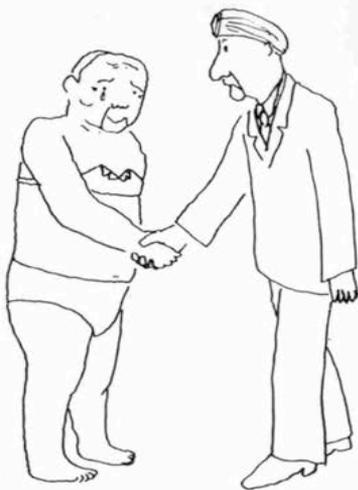
## すてきな省エネ・ルック

講師★岡田 淳





1984



1983



1982



細川 町子  
(料理研究家)

●地球人間

いきいき放談  
(20)



西川 康子  
(リザサロン  
神戸本店SP)



山中 秀男  
(大丸神戸店食品部長)

# この夏、トロピカルフルーツで

## あーあ、これがドリアンの味か…

山中 今までに日本に入荷したトロピカルフルーツは24種類もあるんだそうです。マンゴステインとかパンプータンとか、滅多に入荷しないものも多いんですがネ。

細川 最近はいろんなフルーツが出回ってますが、案外味を知らない人が多いですね。ちょっと試食する機会があるといいんだけど。

西川 そう、どんな味かわからなくて、一個買うのはためらうんです。外食した時に、新しいフルーツのデザートが出ると嬉しい。

山中 “果物の魔王”といわれるドリアンは、高価ですが、一度買って食べると忘れられないようです。細川 フルーツの盛り合わせを注文した時に、一口だけスプーンですくって入れてもらって食べたのそしたら“あーあ、これがドリアンか——”という味でしたわネ。

パツと目が覚める感じなの(笑)

て、それをなめるようにして食べるんです。種は栗のように灼つて食べると、これがまた、すごくうまいらしいです。

西川 そこまで食べると、高価でももとがとれるかもしれせんね山中 マレーシア半島では、ドリアンの実が熟して木から落ちてくるのを原地の人は待ってるんですが、2、3キロはあるので直撃をうけて死ぬ人もあるらしいです。

細川 新しいものを見つけると興味を湧いて挑戦したくなるのネ。アボカドも森のパターとかいって体に良いんですって。無味無臭でサラダ、スープ、お菓子といろいろ利用できますしね。

山中 原産地は南米ですけど、現在はほとんど米国、メキシコ産です。“アリゲーターペアー”とい

って、つまり外観がワニの首筋に似て、るナン——なしです。

べた人は、かなり勇気がいるわネ山中 キーウイはもともと揚子江の原産でニュージーランドの人が見つけて栽培したんです。それで名前をつけるときにニュージーランド原産のキーウイという鳥と茶色い肌には短かい毛がそっくりで名前がつけられたんですね。今は九州や四国、東海地方と国内でも生産されてるんです。

西川 そういえば、最初に食べたキーウイと近頃買って食べるキーウイは微妙に味が違いますね。細川 ペリカンマンゴっていうのもなかなかおいしかったわ。

山中 マンゴはインド産が美味でむこうではカレーに入れるようです。肉料理にパイヤを入れて煮ると柔らかくなるそうですね。

西川 女性は果物が大好きだけど果物売り場って男性も買いに来るのかしら？

山中 いや、男性が果物を買うに長らうるよりは短気な男、つぎど

## 食べ物もファッションも好奇心から

細川 果物には絶対に食べ頃というのがありますね。どんなに高くても、そのちょうどいい頃に食べないと値うちないものネ。適格な例がメロン……。

山中 スイカは経験によって、叩いた時の音で分るらしいです。ボンポンは若いとか、ゴンゴンはうれずぎとかネ。メロンは難しいんですよ。全体の弾力と枝の切り口の色の変わり具合で判断するくらいですよ。あとはカンですね。

細川 私はパイナップルを買うときは、色も見るけど匂いのネ。甘い匂いのしたのが美味しいのよ山中。パイヤやキーウイには蛋

白質の分解要素があって、ステキなどに添えるというらしいネ。

細川 美容のためにも甘いお菓子を減らして、その分だけ果物を食べるよう心がけているの。幸い、家中、果物は好きだし、新しい果物を見つけると飛びつくの。

西川 それはファッションにも関係があることですね。私はこれはダメ、嫌いなもの”と言ってるパターンが決まっています。開けていかに決まっています。興味をもつことが大切だと思うんですよ。

山中 神戸では、珍しい果物が入荷した記事なんかが新聞に出るとその日の夕方とか次の日にはよく

売れるんですよ。

細川 好奇心の強い人が多いのかしらね。私もそうだけれど(笑)

山中 最近、果物と野菜を組み合わせたセットを作っているんですが、ちよつとしゃれてて、若奥さんには評判がいいようです。

西川 例えば生ハムとパイヤをセットにして、”オードブルを作つてめしあがつて下さい”なんてメッセージを添えてプレゼントすると喜ばれそうですね。

細川 アボカドと蟹缶なんてどうかしら。そう、マスカットとワインもおいしいわね。

西川 ワア。もう話をしていてだけで頬が落ちそう(笑)それにしても、トロピカルフルーツは大

人気ですね。

細川 皆が、匂いに鍛えられてきているんだと思うの日本では、生姜と山椒ぐらいの香りだったのが、スパイスも沢山使われるようになったの訓練されてきたのね。それで甘い香りにも誘われて山中 この夏ファッションや音楽、食べ物をトロピカル調に……。

フルーツのように爽やかな西川康子さん<右>、作るのも食べるのも上手な細川町子さん<左> この夏はトロピカルムードでと山中秀男さん<中> (大丸神戸店階フルーツコーナーで)

# KOBE FASHION SPOT

## ★モードとしての新しいきものを披露

大丸神戸店4階特選きものサロンで7月12日(木)催された「そめのさよふ・本郷公盛創作きものコレクション」は高才・本郷公盛さんまでの既成概念にとられない新しい新しいモードンであてやかなきものを見せ、観客を魅了した。このショーはパリ大丸の開店5周年を記す。



本郷公盛氏の作品  
ほかし柄の訪問服

念して開催されたものでパリッ子から熱い拍手をうけ大成功をおさめたもの。京都出身の30代の若い作家たちが、新しい図案と大胆な色使いで、きものと帯が同じ柄で調和されているのが特徴。訪問服や中振袖二十点余りずつが披露された。お値段もかなり張るが、神戸でどのような反響がきかれるか楽しみだ。

## ★多田澄子さんのエレガントな花々

北野町の異人館通りの小路を入った坂道にある落ちついた雰囲気の花店「こみね」でアートフラワーの多田澄子さん(東灘区住吉東町2丁目3-20-705)が、16名のお弟子さん連(ミモザグループ甲種)と共に、六月二十三日から二十五日まで作品の花々が会場を埋めた。



はじめての発表会を開いた  
ミモザグループ右端が多田さん

やさしいモダンな多田さんのお人柄らしくワイヤや葉を基調にした色合いで、野の花や麦の穂、あじさいなど、春から初夏の花々が咲いていた。「10年目をきりに身近に親し

んで頂く作品展と思って開きました。生の花にないけれど生に近い雰囲気、エレガントな優しい感じを出してみましたのですと語った。

## ★より素晴らしい花嫁になるために そうこうブライダルサークルへどうぞ

嫁ぐ日の晴れ姿を心待ちに待っているあなたに、花嫁のための夢のあるサークルへ。そんなブライダルサークルをご紹介します。入会資格は18才以上の未婚女性。各種しるの案内やショッピング情報、文化教室入会などの特典の他に、結婚に役立つ文化教室、生活設計などについての講演会や楽しい行事も企画して、より魅力ある女性になっていただくことが、とスタッフ側も頑張っている。また結婚が決まれば「ブライダリングカード」(買物優待券)がプレゼントされる。そうこう各売場にて対象商品が割引購入でき、結婚式場、海外旅行などの割引もある。現在会員数は約五百名。お問い合わせ、お申し込みはそごう神戸店ファミリーサロンブライダルコーナー 電話2211-4181(内線891)



明日の花嫁のために

た結婚が決まれば「ブライダリングカード」(買物優待券)がプレゼントされる。そうこう

## ★夢のあるインテリア 江戸屋展示会開かる

オリジナル家具で90余年の老舗江戸屋(兵庫区塚本通2丁目1番1号電話751-3120)の恒例展示会が7月12日17日3日にか広場で開かれた。今回はオランダ家具、さぬき民芸家具、北海道具、道民芸家具といつものと趣の違ったインテリアが登場。フランス刺繍の服、部清美さん、アーノトフラワ



会場で沼田・福井・服部の三氏

の沼田

かすみさんの作品とのジョイントも大成功で、連日人気を呼んだ。メインのオランダ家具の重厚感には、さすがに見事で、その手づくりの姿勢に江戸屋のオリジナル家具・ベッ子家具とも共通する精神が見られ、老舗の心意気が感じられる展示会だった。一四での刺繍、フラワー教室の実施などお客も参加できる企画もユニークな催しでした。

## ★ラ・カージュが神戸に上陸!!

ハイセンスなバッグを手坯でオリジナルで、しかも機能的、かつ手頃な価格、と三拍子揃っていて、はるばる東京・青山の本店まで神戸から買いに行くファンが多かった。ラ・カージュが、神戸セントラルプラザ2Fにオープンした。



「今のところはバルブドアの一角ですが、とにかく、ファッショナブルな町神戸の人に合う店画子。神戸っ子の注目を集めそうです。」  
ラカージュ/生田区三宮町一十七番四  
TEL078-392-1501

## ★秦砂丘子創作発表会

毎回、個性的なショーを催す、ニッポアザイナ。秦砂丘子さんの秋冬物コレクション。  
日時/9月4日火 1PM-3PM・7PM  
9月5日水 1PM-3PM・7PM  
場所/演出ホール(港区赤坂7-1-21)  
構成/塚本 砂丘子  
照明/藤本晴美  
美容/川辺サチコ  
入場券/¥3,000(全席指定席)  
お問合わせ、お申し込みは神戸っ子まで

## ★神戸っ子第一回文化講座

日時/8月22日(水)午後2時半-4時  
場所/国際ホテル5階  
講師/大養 孝(万葉の心)  
費用/¥50(お茶券付)  
申し込みは、そごう本館6階ファミリーサロンまで 電話2211-4181(内線891)  
ふるってご参加ください。

暑中お見舞い  
申し上げます



◀神戸の代表的名菓となったお馴染み、大瓦せんべい(上左)  
最良の小豆をたきあげた近代的な餅菓子、楠公餅(上右)  
神戸村の実印を型どったつぶ餡の最中、神戸村(下左)  
摂津の山々を散策した俳聖鬼貫に因んだ、鬼貫(下右)



創業明治元年 神戸・楠公前



菊水總本店

本社・生田区多聞通3丁目12 TEL.382-0080(代)

メトロこうべ名店街・サンこうべ名店街・大阪梅田阪神百貨店・大阪梅田阪急百貨店・  
そごう神戸店・大丸ジョイプラザ店・大丸神戸店・新神戸弘済会売店他でお求め下さい。

食器協力 / 古川軒



## ■娘と飲む珈琲(3)

八馬 正子(八馬真珠商会代表取締役八馬進武夫人)

永奈(甲南女子大学英文科四回生)

母「見かけによらず、こまめに家事をやり、中でも料理は得意で、私よりレパートリーが広いぐらい。妹の未知と二人姉妹なので、主人は礼儀作法に厳しく、私は個性豊かな女性に——と願ってます。おしゃれに関しては私の影響が強いようですがなぜか好みは似かよってしまってます……。やっぱり親子なんですわえ(笑)」。



店内の英国調インテリアが落ち着きますね——永奈



宮水COFFEEの  
にしむら珈琲店

芦屋店(阪神芦屋駅浜側)	☎0797-31-0580	8:00AM—10:00PM
中山手本店(中山手1丁目)	221-1872	8:30AM—11:00PM
石屋川店(阪神石屋川駅浜側)	841-0763	8:00AM—10:00PM
センター街店(三宮センター街)	391-0669	10:00AM—10:00PM
北野店(会員制・山本通2の9)	242-2467	10:00AM—11:00PM



芦屋店



# 最高級住宅街「六甲」に住む。

セキスイハイムが全力を結集して、あなたのために  
最高の邸宅をご用意いたしました。

最高級分譲地 **六甲**

## 篠原台

- 所在地 / 神戸市灘区篠原台17-7
  - 分譲戸数 / 6戸
  - 分譲価格 / 4,560万円 (建物延床面積 ● 135.67㎡ / 土地 ● 200.76㎡ / 1区画) → 4,890万円 (建物延床面積 ● 153.21㎡ / 土地 207.16㎡ / 1区画)
- 〈お問合せ〉

- 神戸ハイム営業所 ☎ (078) 251-8921 (代表)
- 〒651 神戸市灘合区磯辺通4-2-26 (新美蓉ビル9F)
- 三宮展示場 ☎ (078) 232-1831 ~ 2
- 〒651 神戸市灘合区浜辺通6-3  
(神戸新聞ハウジングセンター三宮会場内)

ユニット住宅は



積水化学工業株式会社  
住宅事業本部 大阪ハイム営業部

希少価値の阪急神戸沿線。  
「阪急六甲」駅の山手。

眼下に神戸市内の  
百万弗の夜景が広  
がり、遠く大阪湾、  
紀伊半島までを  
も望める絶好の  
高台の街です。



8/5@

M3 NEW

三宮展示場OPEN!

フラワーロード・東遊地前に堂々オープン。ぜひ一度ご来場ください。



R.O.K.K.O.S.H.I.N.O.H.A.R.A.D.A.I



## ハッセル手に 大いにハッスル!

初老がかった男性が街角を歩いている。肩から掛けたカメラにふと目をやると、ナント、ハッセルブラードではないか。一体どんな人なのだろう、ちよつと前へ回つて顔をみてやろう——などというこ  
とがよくあるそうだ。



■ある集い■

神戸ハッセルブラードクラブ

万円前後、レンズも最低23万円から70万円と超高級だ。システムとレンズを揃えると軽く二百万円ぐらいはかかる。それでも故障は少なく、耐久力が良く、秀れている点が多いため、写真を撮る人にとつては、まさしく憧れの的らしい。

五十二年に発足した神戸ハッセルブラードクラブは、プロの写真家を始め、写真歴の長いベテランが多いのも当然のことだそう。目下、九月中旬よりさんちかギヤラリーで催される「はつする作品展」にむけて、シャッターを切る音も快くハッセルが多いに活躍中だ。

(合わせて34頁もお読みください)

# 敦煌

## 壁画芸術と井上靖の詩

### 井上靖

# 旧交温めた 敦煌展

●神戸 & 新ウベ

お入口

日平友好条約締結記念

靖の詩情

21B9-28

文化庁・中京  
日本国際館

ATD  
#400F  
#300F  
L17R



文/赤尾 兜子  
カメラ/後藤 孝

「敦煌—壁画芸術と井上靖の詩情展」と名づけた展覧会が6月21日から5日間、大丸神戸店も隣り開かれ、その開会式に、東京から井上靖さんはふみ夫人をともなって来神、姿をみせられた。式では、主催者側を代表して藤平信秀毎日新聞社大阪代表(専務)があいさつ、郭平坦中国駐大阪領事、井上夫妻らの手でテープカット、坂井時忠県知事も出席、72歳とはとても見えぬ井上さん「私の個人名を冠した展覧会を多くの人の努力で開いて下さって有難う」と微笑をたたえたあいさつ。



その日の昼食は大丸から近い別館牡丹園。井上さん夫妻を囲んで、下村正太郎大丸副社長、作家・陳舜臣さん、岩井昭三毎日新聞学芸部長、中山義文大丸神戸店長ら内輪の10余人。別館牡丹園の主、王さんに広東料理の珍品をと私があらかじめ頼んでおいたところ、10数品の佳肴が出た。鶏一羽の形をまるまるのこしたスープや、この店じまんの生菜包、蛙の天ぷらなど、ふみ夫人も「まァおいしい」と思わず嘆声、敦煌のこと、文壇のことなど、つきめ話題もまじえて、井上さんも満悦。



若きころ、毎日新聞大阪本社で学芸部記者をした井上さんにとっては、関西は思い出のふかい土地。しかも、そのころ、詩作に相当なウエイトもかかっている、詩人・竹中郁さんとは、その時分からの交友である。

開会式の前夜、神戸に着いて、夕食は国鉄神戸駅に近い「三つ輪」で、すき焼を食べた。「神戸の肉は旨いですね」という井上さんに、ふみ夫人は「なぜでしょうね」と相ずちをうち、街中でも、肉屋の店頭にちょっと足をとどめた。

# 敦煌 壁画芸術と井上靖の詩情展開催記念レセプション



その日の夕、関西各界の名士を招いた記念レセプションが、大丸神戸店で。藤平信秀毎日新聞社大阪代表、小説「敦煌」の最大の協力者、藤枝晃京大名誉教授のほか、佐和隆研京都芸大教授、樋口隆康京大教授、詩人、足立巻一さんら80人が出席。友人を代表して竹中郁さんは「こどもの詩誌(きりん)を出したらとすすめて下さったのは井上さん」陳舜臣さんは「4年前、僕が先遣隊で敦煌へいったような気がします」毎日新聞時代の親友、斎藤栄一さんが「ますます元気でやって下さい」とそれぞれ味のあるスピーチ。